

第 6 章 エリザベス朝のフラワーガーデン

[下線部は『都市緑化技術』No.114 掲載箇所 赤字はその後の訂正箇所]

(仮訳)

“Like a banquetting house built in a garden 庭園に建てられた宴の館のように
On which the spring’s chaste flowers take delight そこには春の純潔な花たちが咲き喜び
To cast their modest odours.” 上品な香りを漂わす

Middleton, *Marriage*.

ミドルトン 『結婚』

エリザベス女王の治世 [在位 1558~1603 年] は、イングランドの歴史における黄金の時代であり、数多くの天才が輩出した。天才たちが取り組んだ芸術、科学、産業の多くの分野の中で、ガーデニングの技術ほど、これらの偉大な人々の力から多くの利益を得たものはなかった。ベーコン Francis Bacon [1561~1626 年 近代哲学の祖] が書いた随想「庭園について」*Essay on Gardens* は誰にでも知られている。パーリー卿 Lord Burghley [William Cecil~, 1520~98 年 エリザベス 1 世首席顧問官] は、イングランドの最も偉大な植物学者の 1 人であるジェラードの支援者であり、サー・ウォルター・ローリー Sir Walter Raleigh [1552~1618 年 探検家・著述家 エリザベス 1 世の寵臣であったがジェームズ 1 世の時代に反逆罪で死刑] のおかげで最も役に立つ野菜であるジャガイモ potato がわが国にもたらされたのである。

[訳注：著者が引用するベーコンの *Essay on Gardens* は、正しくは随想集 *Essays* に収められている 59 の随想の一つである「庭園について」*Of Gardens* である。]

この時期、大陸のプロテスタント信者は迫害され、その多くの者がイングランドに安全な避難場所を求めた。これらの人々はガーデニングに関する外国のアイデアもいくつか一緒に持ち込んできたので、園芸の状況を改善する上で助けとなった。

エリザベス朝時代の庭園は、イングリッシュガーデンの古いスタイルとフランス、イタリア、オランダから輸入された新しいアイデアが結びあわされたものであった。その結果、純粋な国民的なスタイルとなり、イタリアやオランダで見られる運河や養魚池を配した階段式の庭園を何も考えないで真似しただけのものに比べると、この国により適したものとなった。それは昔の姿や習慣と断絶したもので、突然の変異というものでなかった。原始的な中世の庭がチューダー朝初期の愉しむための庭園 pleasure garden へと成長し、それはゆっくりとして徐々に発展するプロセスをたどった末、エリザベス時代のさらに手の込んだ庭園へと進化した。ここで「正式な」formal とか「古典的な」old-fashioned が意味するところは何かと言うと、それは今述べたタイプのようなものを指す；ただし、正真正銘のまったく手の加えられていないエリザベス朝の庭園などというものは稀であるから、それは 100 年後に同じスタイルがさらに発展したものを一般的には指すことになり、それが「正式の古典的なイングリッシュガーデン」として知られることになるのである。

この時期の庭園は建物との関係を厳格に考えて配置され、建物のデザインを考えた建築

家が庭園のデザインも考えた。当時最も著名な建築家の一人であったジョン・ソーブ John Thorpe [1565 頃 ~ 1655 年 ? 今では普遍的な様式である「廊下」を採用] が描いた、建物とそれと一体の庭園の設計図が何枚か現存している。庭園は建物の単なる付属物、あるいは緑の芝生、小径、花壇がないまぜになったものとは位置づけられてはおられず、庭園をデザインすることは、建物の計画よりもより一層の技術を要するものと考えられた ; 「[文明が進化すると] 人間は庭園を繊細に仕上げるより前に、堂々とした建物を建てるようになる ; - あたかもガーデニングにはより完全性が求められるように」(*ベーコン 随想「庭園について」)。サー・ヒュー・プラット Sir Hugh Platt [1552 ~ 1608 年 農業、発明に関する著作家] の意見は、ほかのほとんどの著作家たちが庭園にとって正しい姿は何かということばかりに説明を費やしているのに対し、ルールを明確にしたものとして例外であったようである。†

† 『花のパラダイス、あるいはエデンの園』 1608 年初版 *Floraes Paradise, or Garden of Eden*

彼は「私は読者のみなさんを庭園や果樹園の姿形やスタイルに関する奇妙なルールで煩わせることはしません。長さはどれくらいか、幅は、高さは、花壇、生垣 hedges、ボーダー borders [ボーダー花壇は花壇様式の一つ] はどうするかなど。すべての設計者または装飾者 embroiders、いや (ほぼ) すべてのダンス教師がその細かな違いについてわかっているふりをする。それは彼らが求めるとても小さな発明で、そして学ぶことの少ないものことである」と書いた。

建物の前面には普通テラスがあり、そこから庭園の全体プランというものをざっと見渡すことができるものである。トントンと続く階段と幅広い直線の園路は「直線園路」forthrights ‡ と呼ばれ、庭園の各部分を繋げ、また庭園と建物を繋げる役割を果たしている。

‡ . . . “here’s a maze trod indeed

Through fothrights and meanders . . .

Tempest, act iii. Scene 8.

[Scene 3. の誤り]

まるで迷宮です、これは、

まっすぐ行ったり、曲がりくねったり

『テンペスト』 第 3 幕第 3 場

[小田島雄志訳]

テラスと並行して小径が設けられ、その間は草が植えられた区画、迷路、あるいは結び目花壇で隙間なく埋められている。「直線園路」は建物の設計に対応して作られたが、花壇と迷路のパターンは建築の細部との調和が図られた。エリザベス朝建築に数多く施されている独特な幾何学模様のトレーサリーと花壇のデザインは対となっていた。「人が一般的に好む形は正方形であり」(*ローソン 『新しい果樹園』 1618 年 Lawson, *New Orchard*)、この形が「円形、三角形、あるいは長方形」よりも好んで選ばれたのは「それが人の住まいに最も適していたからである」(† パーキンソン Parkinson)。この正方形の庭園は普通、高い煉瓦か石の壁で囲まれていた。「彼は煉瓦塀で囲まれた庭園を持っている」(‡ シェークスピア 『尺には尺を』 *Measure for Measure*, 第 4 幕第 1 場)。トーマス・ヒル Thomas Hill [1528 年頃 ~ 英語によ

るガーデニングの著作で知られる] の『庭師のための迷路』 *Gardener's Labyrinth* および『ガーデニングの技法』 *Art of Gardening* の両方の書物で使われている絵には周囲が杭で囲まれた正方形の庭園が描かれている。『庭師のための迷路』に3回出てくる別の図には煉瓦の壁が描かれ；かたや3番目のものは、庭園は生垣で囲まれている。壁をローズマリーで覆う習慣は「イングランドでは極めて広く」行われた(§ヘンツナー『旅行記』 *Hentzner's Travels*, 1598年)。ハンプトンコートではローズマリーが「壁全体を覆いつくすように植えられ釘止めされた」。ジェラードおよびパーキンソン Parkinson [John~, 1567~1650年 薬剤師・植物学者・造園家] はともに煉瓦の壁に向かって植栽を行う習慣について述べている。

ジェラードの名前 Gerard は、彼の書いた植物誌の印刷された書名のところには Gerarde と綴られているが、その序文のサインには e の文字はない。

イングランド北部では、ローソン Lawson [William~, 1554頃~1635年 聖職者・ガーデニングの著作家] によると、庭園の壁は「乾いた土」で作られており、「そこには壁の花や各種の甘い香りの植物」を植えるのが一般的であったとされる。

ベーコンはもっと荘厳な計画を持っていた： - 「庭園というものは正方形であることが一番で、四辺すべてを堂々としたアーチ型の生垣で取り囲む。このアーチは大工により作られた柱の上に設けられ、その高さはおよそ10フィート、幅6フィート、その間のスペースはアーチの幅と同じ大きさにする」。このベーコンの理想的な庭園の「美しい生垣」 fair hedge は土手の上に盛り上げられ、そこには花が植えられ、生垣の上には小さな装飾用の小塔、タレット turret が置かれ、さらに「鳥かご」のためのスペースも設けられる；「そしてアーチとアーチの間のすべてのスペースの上の方にちょっとした可愛いフィギュアを置いて、丸い色ガラスの大きな皿も一緒に、それは金色で、太陽の光がキラキラと輝くように」。こんな夢のような装飾が施された生垣など普通とはとても思えないが、アーチ型のアーケードのようなものは、既に見てきたところでもあり、ベーコンのまったく新しいアイデアであるなどとはとても思えないであろう。トーマス・ヒル*は庭園をめぐる様々な塀の形について語っている(*『庭師のための迷路』1608年 *Gardener's Labyrinth*)。「乾いたイバラ」 drie thorne とヤナギでできた木柵を「死んだ、あるいは粗雑な囲い」と彼は呼んでいる。庭園を囲む溝を掘る代わりに例としてローマ人のことを言っているが、「一般的な方法」は「自然な囲い」、すなわち「美しく作られた白イバラ」の生垣は「まじめにやれば数年で十分に分厚く強靱に育つので、庭園の扉以外からは誰一人として敷地の中に入ってくることはできない；とは言え、種々様々な庭園の敷地では、生垣はセイヨウイボタ privet の木で縁取られている。この木は抵抗力が極めて弱い、最近では毎年頭と横の両方を剪定してやればより強くできる」。彼は生垣の植栽について賢い方法を教えてくれている。庭師は野バラ、キイチゴ brambles、白イバラ、グーズベリー、ヘビノボラス [メギ類] barberries の実を集めてきて、その種を meal を混ぜたものの中に入れ、春が来るまでそのまま保存しておく、その場所は古いロープの中、すなわち「長くて使い古したロープで・・・完全に腐ってい

るようなものの中に。」それから春が来たら、鋤でつけた 2 本の畔の溝にそのロープを埋め込み、その深さは 1 フィート半、間隔は 3 フィートとする。・・・このようにしてきちんと埋められた種は 1 か月そこら以内に芽を出し、」 - 「それは数年もすれば庭園や耕地にとって極めて強力な防護壁になるであろう」。このような作業を行う昔の庭師たちは自分たちのやり方を完全に信じ切っていたので、その作業に関して何か失敗するかも知れないなどという心配の欠片を見つけることなどほとんどあり得なかった！

イチイ yew の木は生垣として使われることも多かったが、外回りの囲いより、庭園の中の園路や隠れ家に使われる方が多かった。より規模の大きい庭園では壁に 2、3 箇所、門が作られており、それは上手なデザインで、見栄えのよい石の柱の頭にはボールあるいは持ち主の紋章が置かれ、そして手の込んだデザインの錬鉄製のゲートが付けられていた；さもないとメインの玄関に見事な門が 1 つ設けられ、その他の門は小さくてあまり目立たないもので、単なる「木戸」 a planched gate (†『尺には尺を』, 第 4 幕第 1 場) すなわち「小さなドア」であった。庭園の最も基本的な原則は依然として「中庭」garth、囲い地 yard、あるいは囲われた土地 enclosure ということであった；実際のところ、囲われていない庭園 というような考えは、まだ人々の心の中に生まれてこなかった。しかしながら、庭園が高い壁で囲われていたため、内側の人たちは壁の外を見たいと思うようになり、テラス というものが考え出された。中世の時代にも見られたように、壁の向こうを見下ろせるポイントとして、壁の中に小高い所がある；そして今や我々は、高台の上からの限られた眺めでは満足しないで、壁の向こうの狩猟地と壁の中の庭園を広々と眺めるために、壁の四角形の一辺に沿ってテラスが盛り上げられた、そういう時代に到達したのである。サー・ヘンリー・ウォットン Sir Henry Wotton [1568 ~ 1639 年 イングランドの詩人・外交官] は、「庭園へ最初に入る所がテラスのようにかさ上げされた園路で、そこから眼下に全体の設計が幅広く見渡せるような、そんな庭園に行ったことがある」と言っている。ドウ・コー De Caux [Salomon~, 1590 ~ 1648 年 造園家・建築家 ユグノー派でフランスから帰化] はウィルトン Wilton にあるペムブルック伯爵 Earl of Pembroke の庭園のデザイナーであったが、そのテラスの設計にあたって、「じっくりこれらの場所 platts を見ることをできるようにテラスを作った」(*『ウィルトンの庭園』ドウ・コー 1615 年 *Le Jardin de Wilton*)。もう一つ別の事例としては、1575 年ケニルワース Kenilworth の庭園が「城壁にぴったり沿って気持ちのよいテラスが高さ 10 フィート、幅 12 フィートの大きさを作り上げられ、さらに足元には瑞々しい見事な草原が」と描かれている†。

†ロバート・レイナム Robert Laneham, ケニルワース城の壮観さ Pageants を描写した手紙 1575 年『庭園賛歌』 *Praise of Gardens* からの抜粋, Sieveking, 1885 年

テラスというものは原則として幅広く見栄えのよい形をしており、その端あるいは真ん中に石の階段が設けられている。そして庭園よりも高く、傾斜した草原の土手、または煉瓦、石の壁により盛り上げられているものである。ノーサンプトンシャー州のキルビー Kirby で

は、荘厳なエリザベス朝の建物、それは今や急速に荒廃しつつあるが、かつて「数々の種類の植物により飾られ」‡、その美しさを誇った庭園の名残と言えばテラスだけで、それは庭園の西側の壁の全長にわたり続いている。そこには今はジャガイモが植えられ、そこから見渡せた庭園は今や単なる草原 meadow である。

‡モートン『ノーサンプトンシャーの自然史』1712年 Morton, *Natural History of Northamptonshire*

スペンサー Spenser [Edmund~, 1552頃~1599年 詩人] の『時の廃墟』 *Ruins of Time* の中の詩行は、もし彼がこの庭園の現状を見ていたとしたら、この庭園について書いたのかも知れないと思えるくらいである。

(仮訳)

“Then did I see a pleasant paradize	そして私は心はずむパラダイスを見たのだ
Full of sweete flowers and daintiest delights,	甘い香りの花と最高に優美な喜びで満ちた
Such as on earth man could not more devise;	人間がこの世でこれ以上創造できないようなもの
With pleasure's choyce to feed his cheerful sprights.	人の明るい気持ちを高揚させる愉楽の方法で
Since that I sawe this gardine wasted quite,	この庭園がひどく荒廃してしまったのを見たから
That where it was scarce seemed anie sight;	庭園があった場所にその面影はほとんどないから
Could not from teares my melting eyes with-holde.”	私の悲しむ目は溢れる涙を抑えられなかった

ドレイトン Drayton には、エリザベス朝の建物、これはキルビーと同じ州にあるものだが、ここでは建物の正面のテラスと同様に、幅広いテラスが庭園の外の壁に対して作られており、それぞれの端には夏のあずまや summer-house が設けられている。このほかにもテラスの実例というものは存在している。

「直線園路」、すなわち庭園のデザインの中心的なラインを形作っている園路は「ゆったりと美しかった」。ベーコンは高台に上ることができるこの径の横幅についてこのように書いている。それは「4人が横に並んで歩ける十分な」幅があり、さらにメインの園路は広くて、ゆったりとした幅があり長く伸びる径は「砂利、砂または芝」で覆われている（*ローソン『新しい果樹園』1597年 *A New Orchard*）。園路には2種類あって、一つは庭園の中で上に何も無いオープンな場所で、路の両側に幾何学模様の花壇が配置されたもの、もう一つは囲われている園路で、背の高い剪定された生垣の間を通るものであったり、庭園を囲うメインの壁と生垣の間を通るものである：このほかにも、「覆われた園路」covert walks とか「木陰の小径」shade alleys というものがあり、これらは頭上に樹木がアーチ状に組まれているものである。園路の中には、芝生が敷かれたものや甘い香りのするハーブが植えられているものもある。「空気をこれ以上ないほど心躍らせる香りで包むものは3つある。それはワレモコウ burnet、ヨウシュイブキジャコウソウ wild-thyme、ウォーターミント [ミズハッカ] water-mints である。これらはほかの植物のように通り過ぎていくのではなく、踏まれて潰されていくのである；だからあなたが歩いたり踏んだりして楽しむためには園路

全体にこれらの植物を植えなければならない」(†ベーコン『随想集』)。シェークスピアの一節、『ヘンリー4世第1部』第2幕第4場からすると、カモミールも同じような使われ方をしていたようである。ファルスタッフの台詞「なるほどカミツレ chamomile の草は踏まれれば踏まれるほど早く成長する；だが青春という時は浪費すればするほど早く枯れしぼむものだぞ」[小田島雄志訳]

これに対し、「近い方の園路はできるだけ丁寧に砂利を敷かなければならず、濡れるから草は植えない」(†ベーコン『随想集』)。トーマス・ヒル(§『庭師のための迷路』) が書いたところによると、「庭園の敷地の園路、踏みつけられた小径であっても、きっちり3から4フィートの幅になるように平らにされ、これらは川砂か海砂がきれいに撒かれている場合もあるが、それは、降ってきた雨のシャワーで、足に泥が飛んだりついたりして歩いている人が(その時に) 困らないようにするためである」。パーキンソンも園路については一言あって「小径や園路が美しくまた大きいほどあなたの庭園は気品あるものになるであろうし、ハーブや花の横を通り過ぎる時、小径の横に植えられている植物の受ける被害も少なくなるであろう。またそうすれば草取りの人たちが花壇と小径をよりきれいにしてくれるであろう」と言っている。

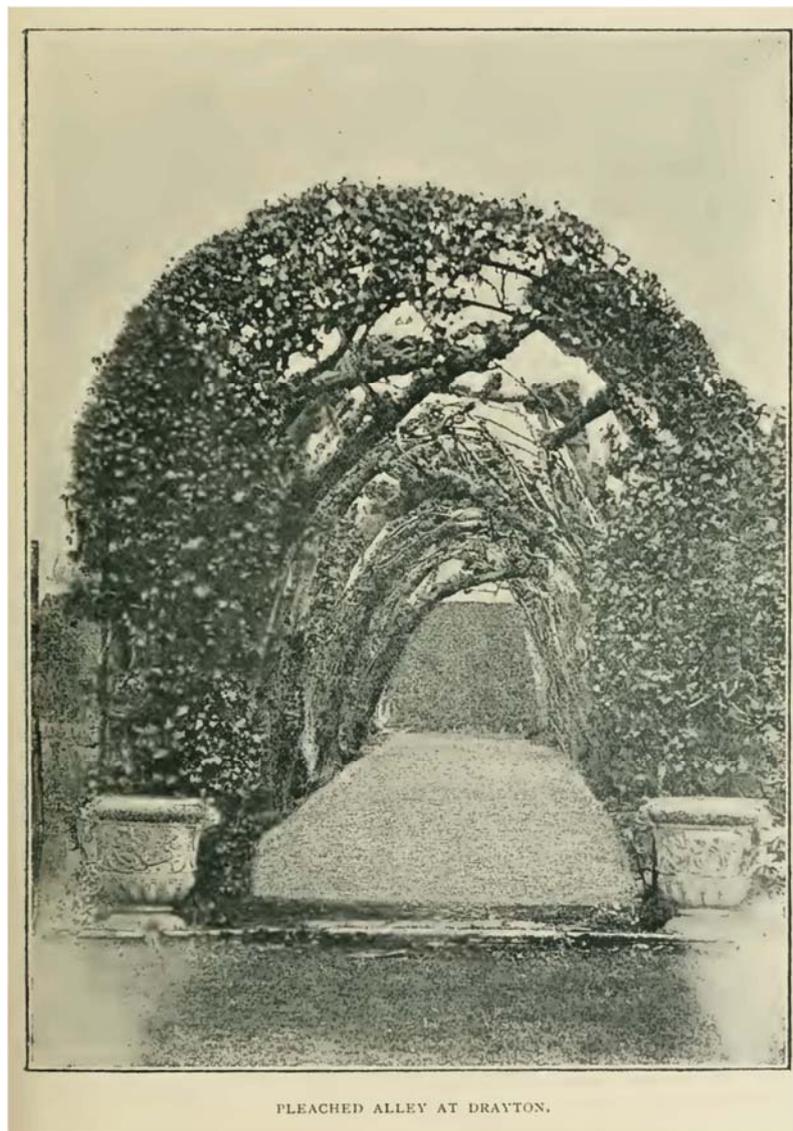
園路の両側にある生垣はいろいろな種類の植物から作られている。すなわち、ツゲ、イチイ、イトスギ、セイヨウイボタ、イバラ、果樹、バラ、野バラ、セイヨウネズ juniper、ローズマリー、セイヨウシデ hornbeam、ミズキ類 cornel、“misereon”、ピラカンサ pyracantha である。「誰でも自分の一番好きなものを使えばよい。セイヨウイボタだけでもよいし、スイートブライアーと白イバラと一緒に組み合わせられているものとか、そしてそれらの間にバラを1種類、2種類、それとももっとたくさんの種類を、ここに、あそこにと置いていく・・・人によってはミズキ類の木を植え、枝を組み合わせる splash、あるいは生垣を作るために低くしておく；そして、低くて棘のある常緑の木、ラテンピラカンサを持ってくる人もいる」(*トーマス・ヒル『庭師のための迷路』)。イトスギについて、パーキンソンはこう書いている：「この木が有する美しい姿形と、あわせて樹冠が常緑であることから、海外と国内の両方において、ゆったりとした園路の両側に一列に植えることは大変重要なことであり、今までもそうであった。この木は上に高く伸びるが横にはほとんど広がらないので、間隔を開けないで植えられなければならない。そうすれば快適で心地よい木陰を作ってくれる」。ジェラードも同じ木について書いて：「イトスギは同様にイングランドの様々な場所で育っており、ロンドン近くの、尼寺であったこともある Sion という場所に植えられたし；またグリニッジやその他の場所でも育った；同様にハムステッド Hampstead では、女王陛下の枢密院書記の一人である Waide 氏の庭園に植えられた」と言っている。

園路および小径の多くは「アーチ型天井かアーチ型植物により木陰が作られていた」(†同書)。ベーコンは「これらの枝組みされた小径」these pleached alleys あるいは「覆われた」園路の目的についてこのように説明している。「しかし小径は長く続くであろうし、ま

た1年あるいは1日の中でとても暑い時に、日差しの中を緑地を歩いて庭園に木陰を求めに行くようなことはすべきではないことから、木陰を歩いて庭園に出ることができるように、高さ約12フィートの、大工が作った枠組みの上を植物で覆った小径を作る(べきである)」。『空騒ぎ』 *Much Ado About Nothing* の中でアントニオがドンペドロとクラウディオが歩いているのを見た「分厚く枝組みされた小径」は、これと同じようなものであった。この“pleach”という用語、あるいは“plash”、“impleach”はフランス語の“plessier”、“plexum”に由来しており、編む plait、包み込む infold、あるいは編み込む interweave という意味である。これはシェークスピアにより、この場合のように、木を切って絡みあわせるという意味だけではなく、編んだ髪という意味でも使われている。『恋人の嘆き』 *A Lover's Complaint* の中では「その髪はねじられた金属で艶めかしく編み上げられていて」と、そして『アントニオとクレオパトラ』 *Anthony and Cleopatra* では、折りたたんだ腕のことを「腕を組み悄然と頭をたれ」[小田島雄志訳]とある。

これらの木陰の園路を作るために使用された植物は、ヤナギ、ライム、セイヨウニレ *wych-elm*、セイヨウシデ、ミズキ類、セイヨウイボタ、白イバラ、さらには「大きなカエデ、すなわちサイカモアカエデ *sycamore* の木がわが国で大事に育てられているのは果樹園だけ、そのほかでは木陰のある園路」・・・「この木は要するに木陰の園路のために植えられているのであり、私の知るところでは我々にとってほかのためには使われていない」(*パーキンソン『楽園』 *Paradisus*)

ハンプトンコートに残っている小径の木はセイヨウニレである。ティオバルズ *Theobalds* でこの木が主に使われていたのは「一番端まで歩くと2マイルあるような散策路」というような小径であった。ノーサンプシャー州のドレイトンには、アーチ型枝組みの小径の代表例が2つあり、それを形作っているセイヨウニレのコブだらけの幹は、時代の証人となっている。覆いのついた小径は木製の格子垣で作られていることがあり、そこにはつる植物と一緒に植えられ、それは初期の時代に見られたものと同様に、「展望回廊のように作られ」、「全体に広がっているブドウや何か別の嬉しくなるような木で覆われている」(+ヒル『庭師のための迷路』)



[図 6-1] ドレイトンのアーチ型枝組みの小径

高台 Mounts は庭園にとって依然として重要なアクセサリーとなっていた。これは憶えておかなければならないことだが、ベーコンが「真に王侯貴族にふさわしいと言える（庭園）について語る」時、高台についてはこのように描いている。「私が望むものは、真ん中に美しい高台があって、そこには 3 箇所上る場所があり、小径は 4 人が横に並んで歩けるくらいの幅がある；それは完全な円で土塁とか張り出しとかは一切あってはならない：そして高台の高さは 30 フィート、上には立派な宴の館 banquetting-house が設けられ、煙突がすっきりと立っている」。このような宴の館は何か特別な場合のためだけに作られることが多く、いつまでも残るものとの印象を醸し出すためにツタや常緑植物で飾られた。当時は壮観さを喜ぶ時代であり、このような見せ方に対する背景となっていた。このことは、同じ見せることへの愛着が創造し発展させつつあった美しい庭園よりもさらに強くここに

表れていた。何か催し事や「祝宴」revellsがあれば、お客様をお迎えするために庭園の中
のあずまや、あるいは宴の館に追加的な仕掛けが施された。1554年の6月、「Bowes (=大
枝 boughs) やそのほかのお楽しみの仕掛けが施されたある宴の館」がオウトランズで作ら
れることになり、サー・トーマス・クウォーデン Sir Thomas Cawarden [1514~59年] が
「祝宴事務局長」Master of Tents and Toylesとして、王室からその設営を監督することを
命じられた。それは彼が「この類のことに関し今までの経験が豊富」であったからである
(*写本 M. More Molyneux 所蔵 ラウズリ, サリー)。以下の引用から彼の過去の経験、すなわ
ち彼が何をしなければならなかったか、そしてその実行のための費用について、その様子
の一部がわかる(†同書)。「エドワード6世 [在位1547~53年]の第4年 - 宴の館2棟、一
つはハイパークのもので、長さ57フィート、幅21フィート、高座への階段がついてい
るものが収容できる大きさで、一辺の幅が60フィート、もう一辺が40フィート、そして
その上には小塔のようなものが飾られた。もう一つの館はメリボンパーク Marybone Parke
のもので、長さ40フィートのものが収容できる大きさで、隣同士が組み立てられ、木材、
煉瓦、石灰で作られており、暖炉やその他必要な設備が付いていて簡単な用が足せて、そ
して同様の例では、そのうちの6つの施設 standinges は前述の狩猟地のどちらかにあり、
すべて木製の3つは大枝や花で飾られそのどれもが長さ10フィート、幅8フィートのもの
が収容できる大きさだった***上記の仕事をするため22日間雇われ、食べたり飲んだり
する時間以外は24時間」。大工と煉瓦職人は時給1ペンス、労働者は時給 $\frac{1}{2}$ ペンス - 左官屋
は日給11ペンス、塗装屋は日給7ペンスと6ペンス。「ハイパークの森の大枝を切り、
宴の館をこざれいにし、イグサ、アヤメ類、ツタを集める費用」、「屋根を縫った仕立て屋
など：窓のところのバスケット作製者 - 総費用169ポンド7シリング8ペンス。

ストーの『年代記』Annalsでは、これらの宴の館のもう一つ別のものが記されている。
これは1581年、ホワイトホールに「フランスからの某大使のために」建設された。その形
は円形で一周332フィート、川の近くの宮殿の南西に建てられた。雲のような色に塗られ
た、キャンバスでできた屋根越しに、「この建物はツタとセイヨウヒイラギを使って巧妙に
仕立て上げられ、天井からは小枝を編んだ棒で作られたつり飾り pendants があり、飾り付
けには月桂樹 bay、ヘンルーダ rue、そしてあらゆる種類の変った花、それは金のスパン
コールで飾られていた・・・花綱飾り festoons [花、葉、リボンなどをひも状にした飾り] で美
しく飾られた、それはツタ、セイヨウヒイラギで作られ、ザクロ、オレンジ、カボチャ
pompions [ギリシャ語で大きなメロンの意] キュウリ、ブドウ、あらゆる変った果物と一緒
に、金のスパンコールのようなものも、とても豪華に吊り下げられていた」。

もちろん、そのような宴の館は国家的行事の時だけに建てられ、また裕福な人にしかで
きないことであった。一般的な庭園の高台では極めて質素な姿のあずまやが乗っているく
らいだった。そのような高台というのは眺めの良さを確保できるポイントとして大変便利
であったであろう。特に、テラスをかさ上げできるほどには庭園がそれほど立派ではなか
ったり大きくない場合にはそう言えよう；しかし、このような比較的控え目な庭園では、

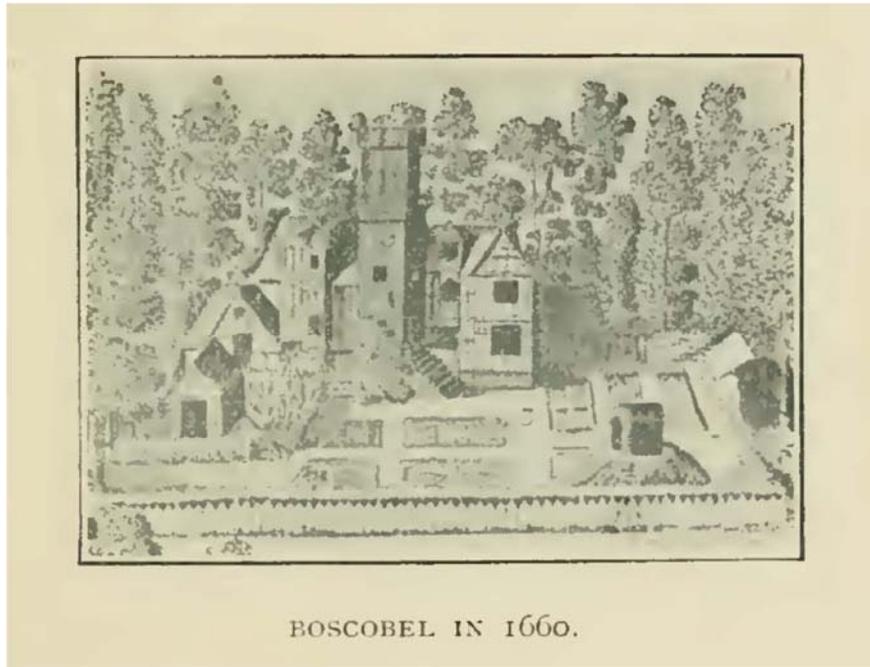
花の咲く植物やつる植物が植えられていない限り、高台は美的な対象とはなりえなかったであろう。そのような高台は**ボスコベル** *Boscobel* に今も見ることができる。これ以上質素なものを見つけることはおよそできないであろう；そしてこれは私が今話している高台の多分良い実例の一つになると思われる。もっともこれはエリザベス朝時代ほど初期のものではありえないが。この高台は建物が建てられた 1620 年頃、時を同じくして作られた可能性が高く、チャールズ 2 世がすぐそばのオークの木の中に隠れた時、その高台は今ある姿と同じ形になっていた。



[図 6-2] **ボスコベル** 1894 年

ウースターの戦い *Battle of Worcester* は 1651 年 9 月 3 日水曜日に戦われた。次の土曜日、チャールズはボスコベルの「国王のオーク」*Royal Oak* に隠れて過ごし、その翌日、「国王陛下は自分の身が今や安全になったものと希望を持ち、この日曜日の何時間かをボスコベル庭園の可愛らしいあずまやで過ごした。そこはそのうち高台になり、石のテーブルとその周りに椅子が置かれるようになった。この場所で国王はしばらくの間、読書で時を過ごし、隠遁場所にふさわしいと称賛した」*。

*『ボスコベル、すなわちウースターの戦いの後の最も奇跡的な国王閣下の護持、1651 年 9 月 3 日』トーマス・ブラウト著 1660 年 *Boscobel, or the History of His Sacred Majesties most miraculous Preservation after the Battle of Worcester*, By Thomas Blout; 再版 1822 年。121 ページの図版 [図 6-3] はこの本からの引用。



[図 6-3] ボスコベル 1660 年

高台は庭園の中に屹立している丸っこいコブであるといつも言える訳ではなかった；それは依然として時には外の壁に対して盛り土された形のものもあったようだ。ベーコンはこのタイプのものについても書いている：「敷地の横の両端に、自分ならちょっとした高さの高台を作るであろう。囲いの壁は胸の高さにとどめ、外の野原を見渡せるようにする」と彼は書いている。高台の上に建物を建てることで、庭園の中のあまり目立たない場所にあるあずまやの利用をやめる、ということにはならなかった。「ウッドバイン [センニンソウの一種] woodbines が蔓延ったあずまや」 (*フレッチャー『忠実なる羊飼い』 Fletcher, *Faithful Shepherdess.*) とか「そのスイカズラは日の光を受けて育ちながら、日の光をさえぎる」(†『恋のから騒ぎ』第3幕第1場 [小田島雄志訳]) と描かれた枝組みで覆われたあずまや pleached bower は、人が近寄らないような場所にはきっとあったに違いない。トーマス・ヒルはこのように書いている (†『ガーデニングの技法』)。「あずまやの作り方としては、普通に作るか植物を這わせるか、あるいはアーチ型天井にするか、今作られているブドウのあずまやのように、頭上近くに持ってくることもできよう。もしあずまやをセイヨウネズの木で作るならその後 10 年間は何も修理する必要はない；しかしもしヤナギの棒で作るならその後 3 年ごとに新しく修理しなくてはならない。あずまやの周りにバラをめぐらせようとしたり、花壇を作ろうとするなら、それは 2 月にしなければならぬ。・・・そしてもしジャスミン、ローズマリー、あるいはザクロのような甘い香りの木や花の種を蒔こうとする場合は、ブドウであずまやを飾る方がふさわしいと思わない限りは、同じようにすればよい。あずまやに使われたその他の植物のいくつかはパーキンソンから学べる。「ジャスミンの白と黄色、

二重咲のニオイスイカズラ、センニンソウ類 Ladies' Bower の白、赤、紫で一重と二重咲、これらが最もふさわしい外国由来の植物で、あずまや、宴の館の横に植えられるべきものである。これらの建物は前と上の両方が開いていて、それらを包むように、また見た目にも、香りもそして喜びも与えてくれるように。The Ladies' Bower とは Clematis Vitalba [キンボウゲ科センニンソウの一種] のことで、あるいは「旅人の喜び」traveller's joy とも呼ばれ、5種類ほどのクレマチスの外国種のことである(§『楽園』392ページ)。インゲン豆 kidney beans も使われた。インゲン豆は「簡単にかつすぐ芽が出て、ものすごい長さへと成長する；種を蒔く場所は、そのすぐ近くで縛りつける長い棒の近くか、あるいはあずまや、宴の館のすぐ近くが良い」(*ジェラード『植物誌』1141ページ)。

パーキンソンはライムの木の中に作られた変わったあずまやのことを描いている。彼が言うところでは、その木は「上等なあずまやおよび夏の宴の館を作るために植えられ、その下の地面では、大きな枝が非常に気持ちよくその場所を包み込む役割を果たしている。あるいは上の方に高く二重、さらに三重と積み重なっている」。そして続けて、彼の説明によると彼が目撃した中で「かつてない最高に感じの良い眺め」と言えるのは、ケントの Cobham のものであり、そこではあずまやはこのようにして作られていた。歩くための板が地面から 8 フィートの高さの大枝の最初の一連の塊の上に置かれ、そこから枝が取り払われた幹が 8 から 9 フィートまた続き、そして真ん中の部分の屋根となるように 2 番目の枝の塊が覆いかぶさり、さらに 3 番目のあずまやの床部分があって、そしてそこに上るために階段が設けられている；このあずまやは「少なくとも 50 人」収容できそうである、と彼は言う(+『楽園』610ページ)。スペンサーの『妖精の女王』*Faerie Queen* の次の一節は、エリザベス朝時代のあずまやについて生き生きとした印象を私たちに伝えてくれるものであり、多分それは放置されたままの庭園の一角に残された、崩れ落ち、草が生い茂ったあずまやの痕跡が伝えてくれるものをはるかに凌ぐものであろう。

(仮訳)

“And over him Art, striving to compare	そして彼の上に人間の技が、比べようとするのは
With Nature, did an arbour green dispread	自然の美しさ、あずまやの緑を広げ
Fram'd of wanton ivy, flow'ring fair	伸び放題のツタに囲まれ、花は咲き誇り
Through which the fragrant eglantine did spread	そこから優美な香りが広がり
His prickling arms, entrail'd with roses red	トゲのある枝に赤いバラがからまり
Which dainty odours round about them threw:	上品な香りをその周りにまき散らし
And all within with flow'rs was garnished,	そして内側は一面花で飾られ
That, when mild Zephyrus amongst them blew,	柔らかな西風その間を吹き抜ける時
Did breathe out bounteous smells and painted colour shew.”	豊かな香りが漂い美しい色彩を放つ

- Book II., Cantos V. 29

第 2 巻第 5 篇 29

迷路 maze は、今や多くの庭園で見られるようになったもう一つの特徴であった。「ラベンダー、cotton spike、マジョラムなどで作られた迷路、あるいはヒソップとタイム、サンザシの生垣 quickset、セイヨウイボタ、枝を組み合わせた果樹で作られた」(トーマス・ヒル)。ローソンは迷路を作る際の説明をしており、「迷路が人間の背の高さまで作られた場合、あなたのお友達はベリーを摘みながら歩き回り最後はあなたの助けなしには迷って出ることとはできない」と言っている。トーマス・ヒルは迷路について 2 つのデザインを提案しているが、これは「庭園になくてはならないもの」というのでなく、「むしろ」・・・「自分の庭園にそのような余地があって希望するなら迷路の一つでも設けて・・・その空いている場所に・・・時々はその中で遊ぶことを唯一の目的とするために取っておくのが一番よいであろう」と述べている。



[図 6-4] 迷路

多くの人、迷路という言葉聞いて、ハンプトンコートにある有名な実例を直ちに思い浮かべるであろう。あの迷路は何千人ものロンドン市民や行楽客に多大なる楽しみを提供しているが、あれが作られるのはずっと後になってからであり、多分 1700 年のことだったであろう。

風変わりな形に剪定された木を生垣の間にしばしば発見することができるが、それらは点々と配置され、木を通した眺めと園路を作るために作られているものである。ベーコンは「大きな生垣に囲まれた敷地の使い方について」・・・「そこにはあまりごちゃごちゃと、

いろんなものを詰め込まない方がいい」とアドバイスしており、言い換えると、あまり飾り立てないということで、「自分としては、ネズとかほかの庭園の材料を刈り込んでいろいろな形を作ることは好きでない - それは子どもたち向けである。衣服の縁飾りのように、小さくて低い生垣を丸く、ちょっとした可愛いピラミッドがある、そんなものが好きだ。そしてところどころに美しい柱がある」とベーコンは付け加えている。

剪定された木は普通はイチイの木、という観念は大変広く広まっており、古い庭園に今も残っている昔のトピアリーはこの印象が正しいことを示している。ヨーク近くのヘスリントン Heslington の庭園にある剪定された木すべてがイチイである。この庭園は、館が建てられた直後、1560年頃、設計されたものである。



[図 6-5] ヘスリントン

ロッキンガム Rockingham にある美しく丸く刈り込まれた生垣、エルベステック Erbstock の生垣や木はこの時期の剪定されたイチイの 2 つの代表例である。しかし、この時代の本を見ると、イチイとは違った別の低木 shrubs のことがより好ましいものとして語られている。ということは、イチイは成長が遅く、たくましい木で、常緑樹であったために、他の低木に比べイチイの方がたくさん生き残ったということのようだ。パーキンソンは「イチ

イを使うこと」について「果樹園のコーナーと建物の窓に面して、この両者で植えられるのは、この木が常緑であるため、木陰と飾りの両方に役立つから」と言っている。一方、セイヨウイボタについては「この植物がここまで多く、ここまで頻繁にこの国全体を通じて使われるのは、庭園その他における生垣やあずまやを作るだけの目的であるにもかかわらず、ほかの植物ではできない、どんな形にでも刈り込んだり、方向付けたり、形作ることがしやすいからで、動物であろうと鳥であろうと武具を着けた男であろうと何でも好きな形にできた：それは生垣の茂みであっただけなのに、私はそれを忘れることはできない」と書いている。「あなたの庭師は」とローソンが 1618 年に書いたところによると「あなたの小さな森を、戦場において今にも戦いに臨もうとしている武具を着けた男の姿に形作ることができる：または足の速いグレーハウンドが鹿を追いかけたり、野ウサギを捕まえる形にできる。このような狩りなら食料、ましてやお金を無駄にはしないであろう」。



[図 6-6] コテージガーデンのトピアリーの例 ハドン

ローズマリーもまた「自分たちが楽しむために様々な形で女性たちにより植えられた。その形とは馬車、孔雀、あるいは彼女たちがふと思いついたものなどであった」*。

*バーナビー・グーグ著『農業』、コンラッド・ヘレスバッハの翻訳 1578 年 Barnaby Googe's *Husbandry*.
Translation of *Conrad of Heresbach*

花は園路や生垣に沿った縁に「そっと控え目に、木の邪魔にならないよう」(＋ベーコン) (すなわち、木の栄養分を奪い取らないように) 植えられた。とは言え、花が主に植えられたのは「結び目なしの花壇」open beds であり、これは複雑な結び目と対比して区別するために「オープン・ノッツ」open knots [結び目なし] と呼ばれた。この当時の本はすべて結び目のデザインについて触れているが、実用的であることを最重要視する庭師たちは、「この奇妙な結び目庭園」に対し好感を持たなかった(‡『恋の骨折り損』, 第1幕第1場)。パーキンソンは彼の読者の「希望を満足させる」ためだけに、デザインに関し1ページを割いている; 彼自身は「オープン・ノッツ」の方が、花を見てもらうためにはふさわしいと考えていた。タイム、アルメリア[ハマカンザシ]thrift、ヒソップ hysop、その他何でもあれごちゃごちゃした模様が施されたラインの間にそのほかのものを植える余地はまったく残されていなかった。時には色のついた土でこのデザインがあっさり描かれることもあったが、そのようなやり方はベーコンがよしとするところではなかった; - 「結び目や形を各種の色の土を使って作ることにして・・・それは子どもだましに過ぎず、お菓子のタルトに見栄えの良いものをたくさん見つけれられるだろう」。よりシンプルな結び目は普通ツゲで縁取られており、こういうやり方はフランス人の庭師によりもたらされたものであろう。パーキンソンはこれを「フランス風またはオランダ風ツゲ」と呼び、「主として、その他のハーブに先んじて」推奨した。そうすれば、「アルメリア、ジャーマンダー[ニガクサ]germander、マジョラム、セイボリー[キダチハッカ]」などのように花壇をはみ出して生い茂ったり、模様を歪めることにはならないだろうし、また「冬の霜や雪」、「夏の湯水」にそんなには悩まされずに済むと考えられたからである。コットンラベンダー[ワタスギギク]Lavender cotton(*Santolina chamæcyparissus*)は新しく輸入されたもので、これも使用されたし、また「このハーブの希少さと目新しさは、ほとんどの場合、立派な御仁の庭園にあってこそ、より尊重されるとされた」(§パーキンソン)。

仮に、ハーブやツゲが縁取りに使われない場合には、「生命のない材料」が代用された。すなわち鉛そのものか「教会の胸壁のように型抜きされた」鉛、オークの板、タイル、羊の脛の骨、これらを「地面に支柱として立て、細い方を下にして、そうするとそのうち白くなり地面を美しく見せるであろう」。別のやり方は「丸くて白っぽい、それとも青っぽい小石」を使う方法で、この手法はパーキンソンが彼のリストの一番最後に掲げているが、「その理由は、それが最新の手法で・・・結構見栄えを良くしているからである」。このような石を縁取りに使うなどというこんな簡単なことをそれまで考えつかなかったというのは考えてみれば変である。この縁取りの内側で、「オープン・ノッツ」が花で埋められ、「すべての植物がそれにふさわしいように、お互いにほどよい間隔をとって植えられ」、それが「庭園に対し、そこが多彩な光輝く色が織りなす一枚のタペストリーの如く見えるような優美さを醸し出すことになる」。パーキンソンは庭園に植えるべき花を「イングランドの花」と「外国の花」との大きく2つに分けている。イングランドの花として彼は、私たちが既に

見てきた初期の時代に育てられていたようなすべての花の名前を挙げています。たとえば、サクラソウ、デイジー、マリーゴールド〔キンセンカ〕、ナデシコ類 gilliflowers、スミレ、バラ、セイヨウオダマキである。一方、外国の花、すなわち「我々にとって馴染みがない花で、その色は美しく煌びやかで、わが国に自生 own-bred している多くの花よりも前にずっと早く、我々をその喜びの虜にさらに強く引き込む・・・そのような花はほとんどあらゆる場所で、あらゆる人々、特にこの国の紳士階級の中でもより上層階級の人々とともに見られ、「すなわち、ラッパスイセン Daffodils、バイモ Fritillarias、ヒヤシンス Jacinths、サフランの花、ユリ、アイリス Flowerdeluces、チューリップ、アネモネ、フランスカウスリップ〔キバナノクリンザクラ〕French cowslips あるいはアツバサクラソウ Bears' Earsその他同様の数々の花で、とても美しく楽しく快適なもの」であった。

「外国の」花の数は、わが国の庭園の中で急速に増加しつつあった。この時代全体を通じて花は旧世界、新世界の両方から入ってきた。以下に述べるものは輸入されたもののうち最もよく知られているもののいくつかである： - 「ヨウラクユリ」The Crown Imperial のオレンジと黄色の両方の色、小さなバイモの変種、当時の呼び名では「トルコ Turkie またはギニアの花 Guiniehen flowers、すなわち格子縞のラッパスイセン chequered daffodil」、耐寒性の（ヨーロッパ産）シクラメン cyclamen (*europoeum*)；ベニバナサワギキョウ *Lobelia cardinalis*、トケイソウ Passion flower (*Passiflora incarnata*)、別名“Virgin climber”。クリスマスローズ Christmas rose、別名 *Helleborus niger*、*niger angustifolius* and *vernalis*。普通の白のライラック、別名“pipe tree”、セイヨウバイカウツギ *syringa* (*Philadelphus coronarius*)；そして普通のコトネアスター〔シャリントウ〕cotoneaster およびラブルナム〔キバナフジ〕laburnum；マルタゴンリリー〔カノコユリ的一种〕*martagon lilies* のいくつかの品種；普通の黄色のジャスミン；甘い香りのオシロイバナ *marvel of Peru*、メマツヨイグサ evening primrose、そして耐寒性のムラサキツユクサ spiderworts；アフリカンマリーゴールド〔センジュギク〕African marigold、ヒマワリ sunflowers、チドリソウ larkspurs で単年草、多年草の両方；スノーフレーク〔スズランスイセン〕snowflakes、これは「球根性スミレ」“bulbous violets”！としてスノードロップ snowdrops の仲間とされたもの、およびラナンキュラス *Ranunculus*、「イリュリアのキンポウゲ」“the crowfoot of Illyria” (*R. illyrius*) とハナキンポウゲ（いわゆるラナンキュラス）*asiaticus*、そしてパチェラーズボタン Bachelor's buttons. (*R. plantanifolius flore-pleno and aconitifolius*)、これらは「アルプスの山から」持ってこられた；スイートサルタン〔ニオイヤグルマギク〕sweet Sultan、the *Centaurea moschata*〔スイートサルタンの学名の一つ〕ハクセン *Dictamnus Fraxinell*；ハウセンカ *Balsam impatiens*；ベルフラワー〔ツリガネソウ〕*campanula*、ヒルガオの仲間 *Convolvulus minor* (*C. bicolor*)。

新しい植物のいくつかは、ガーデニングの支援者である先導的な何人かの人々の尽力によりもたらされた。パーリー卿とカル 卿 Lord Carew [George~, 1555~1629年] はイングランドでオレンジを育てようとした最初の人たちであった。ソールズベリー卿 Lord

Salisbury [Robert Cecil~, 1563 ~ 1612 年] は海外から果樹の新種やその他の植物を調達するためにトラDESCANT Tradescant [1570 ~ 1638 年 博物学者・園芸家] を雇った。ズーシュ卿 Lord Zouche [Edward la~, 1556 ~ 1625 年] もまた園芸を推進した人の中で主要な地位が与えられるのにふさわしい人である。彼はローベル Lobel [Mathias de ~, 1538 ~ 1616 年 フランドルの医師・植物学者] のパトロンでありハクニー Hackney に立派な薬草園を持っており、それをローベルが管理していた。ズーシュ卿自身も海外から植物を持って帰ってきた。ジェラードは特に 2 点指摘している。「小さなキャンディーマスタード」The Small Candy mustard は「オーストリア、キャンディー [訳注] スペインおよびイタリア」に自生しており、「それらの地域から」帰って来る時に彼によって持ち帰られたものである。また「チヨウセンアサガオ」Thorne apple の種は彼からジェラードに贈呈された。

[訳注 : Candy とは原産地であるクレタ島の古名 Candia が訛ったもの。Candy mustard の別名は candytuft キャンディタフト [マガリバナ] burnt candytuft は岩生のエチオネマ aethionema saxatile]

新しい植物とガーデニングに関する新しいアイデアもまた、プロテスタント難民の流入とともにフランスとオランダから入ってきた。この国に来たユグノー派の人々はほとんどすべての商工業の各分野から来ており、そして特にガーデニングの分野ではこれらの新市民の影響のもと、大きく改善が進んだ。そしてこの工業分野のメンバーは 1544 年の英国籍取得状 Letters of Denization を取得した人たちであった。これらの外国人庭師の多くはサンドウィッチ、コルチェスターおよびノリッジに定住し、この地域のガーデニングを大きく改善した。近所の地主の中には外国人庭師を雇って、その庭園を改造したり設計させた。1575 年、オランダ人庭師に 3 シリング 4 ペンスが支払われたが、これは「ノリッジからヘングレイヴ Hengrave まで果樹園、庭園、園路を見てもらうための旅行に対するもの」で、40 シリングについても「オランダ人に支払われたが、これは結び目の剪定、小径の改造、土地のセッティング、ハーブを見つけること、そしてそれを縁植えすることに対するものであった」*。また、「花の展示会」Florist Feasts を初めて開催したのもこれらの外国人で、ノリッジはこの展示会で有名であった。

*ユグノー協会『ノリッジにおけるワロン人と彼らの教会』1887 年 Huguenot Society. *Walloons and their Church at Norwich*. W.T.C. Moens [ワロン人とはベルギー東南部のフランス語圏の人々]

この時代に典型的な庭園では、花壇の間、テラスに沿ってあるいは園路の横にところどころ、鉛または石の器 vase が置かれることがあり、そこには花が一杯に生けられたり、そのまま飾りとして置かれていた。美しい鉛製の器の例は今でも古い庭園のいくつかに見ることができる。ノーサンプトンシャー州ドレイトンでは、これらのサイズの異なる器が庭園全体にわたり数多く置かれている。117 ページの図 [図 6-1] には 2 つ見つけられよう。その他の飾りについては、後の時代ほどには多く見られない ; 「偉大な君主たちは時に威厳や壮麗さを求めて彫像とかいろいろなものを付け加えることがあったが、それは庭園の真

の喜びとは何の関係もなかった」(*ベーコン)。

パーキンソンによると、庭園というものは「その真ん中に噴水」を持つべきであり「そこから庭園のあらゆる場所に地下のパイプによって水を運ぶか、あるいは手作業によって運んで都合のよい場所に置かれた大きな水盤か大きなトルコ風甕に移すこと」と述べた。

ベーコンは次のように書いている： - 「噴水、それは大いなる美しさと清涼剤；だが水たまりはすべてを台無しにし、庭園を不健康にし、ハエやカエルで溢れかえる。噴水には 2 つの性質を持ってほしいと私は思う；一つは水を一面にまき上げ、噴き出す、もう一つはおよそ 30 から 40 フィートの水の美しい受け皿で、しかしそこには魚も、ヘドロも泥もない。最初のものについては、金張りや大理石の彫像で、今使われている装飾で十分である。・・・またそこに上る段々とかその周りのきれいな敷石があると良い。もう一つのタイプの噴水については、水浴び用プール bathing-pool とでも呼べ、変わった趣向とか美しさをいろいろ加えることができるかも知れないが、それについてはここでは扱わないでおこう；たとえば、底が美しく石で敷き詰められ、絵模様が見える；側面も同じように彩色ガラスやキラキラ光るもので飾られ、その周りは背の低い彫像がきれいな列をなして取り囲んでいる。普通の庭園では、「水の美しい受け皿」はそれほどには飾り立てられず、単に直線的な池で石の階段が各コーナーに設けられ、その他の土手は滑らかな芝生で覆われているようなものに過ぎなかった。1595 年 11 月 25 日、サー・トーマス・セシル Sir Thomas Cecil [1542 ~ 1623 年] はウィンブルドンからラウズリ出身のサー・ウィリアム・モア Sir William More [1520 ~ 1600 年] 宛てに次のような手紙を書いた。「モアが大きなプールをいろいろ作ったと聞いたので、そちらにいる腕のよい職人を一人紹介して欲しいとセシルが頼んだ。なぜならその年彼が作った大きなプールの、一部の土手が未熟な職人のせいで崩れてしまったからであった」(*写本 サリー州ラウズリの手紙)。ラウズリのプールはしばらく存在していたに違いないと思われるが、それは 1581 年 12 月 21 日付けで、エリザベス女王の魚屋の Henry Sledd がサー・ウィリアム・モアに手紙を書いて、彼の池の鯉を何匹か買いたいと申し出たからである。魚屋は大きさによって一匹 12 ペンスから 18 ペンスで買いたいと言い、「もし私が見て鯉がもっと価値があると思ったら、お値段は見直します」と付け加えている(†同書)。

一番目のタイプの噴水に関しては、ベーコンが書いた当時一番最高と思われる庭園の中に多数の事例が見出される。ヴュルテンブルク公爵フレデリック Duke of Wurtemberg [1557 ~ 1608 年 エリザベス女王に騎士への叙任を嘆願したドイツ人；正しくは Württemberg] は彼がハンプトンコートで見たものについて、1592 年にこう書いている ‡：

‡ 翻訳 1602 年 - プレンチリー・ライ著『外国人から見たイングランド』所収 1865 年 *England as Seen by Foreigners*. By Brenchley Rey

「第一主宮殿の真ん中に見事な背の高い巨大な噴水があり、そこには独創的な水の仕掛け water-works が施されていて、もしお望みならそばに立っている淑女などに水をかけてび

っしょりと濡れさせて喜ばせることができる」。この同じ噴水についてノーデン Norden [John~, 1547 頃 ~ 1625 年 地図・地形図製作者] が 1598 年に書いているが、それは「エリザベス女王は最近第二宮殿に大変美しい噴水を作することを命じ、それは王宮を優美に見せ、重要で必要な時に役立つものである；噴水は 1590 年に、大きな変更もなく完成した」というものである。同種の別の事例は、ホワイトホール宮殿について、ヘンツナー Hentzner [Paul~, 1558 ~ 1623 年 ドイツ人 イングランドなど欧州旅行記の著者] が 1598 年に書いたものがある： - 「日時計のある噴水 jet d'eau は、訪問者がそれを見ている間、庭師が離れたところから回す回転輪により送り込む一定量の水により、数多くの小さなパイプを通じ、周りに立っている人たちに大量の水を撒き散らす」。ヘンツナーはノンサッチも訪れており、そこでもいくつかの噴水に目を留めている。「王室専用庭園」privy gardens には 2 つ噴水があって「一つがもう一つの周りに水を吹きかけ、それはあたかも嘴から水が流れ出るように小さな鳥を止まらせてあるピラミッドのようである」。「ダイアナの森」にある噴水は「女神と妖精たちに水をかけられている鹿に変えられたアクタイオン Actæon [訳注] を模ったもの、それと「近づく者すべてに水を吹きかけるパイプがたくさん隠されている大理石のピラミッド」がある。噴水を表す“jet d'eau”という単語は、このような噴水について同時代の作家によって普通使われたが、それはフランスから持ち込まれたことを指し示しているように見える。

[訳注：アクタイオンは、月と狩の女神アルテミスの水浴姿を見たため呪われて鹿に変えられ自分の犬に八つ裂きにされたボイオティアの獵師（ギリシャ神話）。ローマ神話ではダイアナ]

庭園に持ち込まれたほかの水の使い方としては；リトゥルコウトの果樹園を流れているマスの小川、あるいはウィンチェスターの首席司祭邸 Deanery の庭園の小川があり、そこではアイザック・ウォールトン Isaac Walton [1593 ~ 1683 年 イングランドの随筆家 『釣魚大全』の著者] が魚釣りをよくした場所である。フランシス・カルー Francis Carew [1602 ~ 49 年] の所有であるベディントン Beddington (サリー州) は、ヴェルムサ・フォン・ヴェンデンハイム Wurmsser von Vendenheyne により、1610 年「イングランドの中でも最も気持ちがよく、そして装飾的な庭園の一つであり、美しい小川がたくさん流れている」と描かれている。ティオボルズとハットフィールド Hatfield には水があった。ハットフィールドでは（*家族の写本より ソールズベリー侯爵所蔵）デル dell と呼ばれる小さな谷間を流れる小川の土手が花壇や様々なあずまや、そして園路で美化され、それらは装飾的な橋により反対側の土手にあるブドウ畑と結ばれていた。この仕事は Mountain Jennings というソールズベリー第一伯爵の庭師によりデザインされ施工された。Simon Sturtivant という名のフランス人は精巧な水の仕掛けを計画したが、伯爵が 1612 年に死んだため、実施されることはなかった。サロモン・ドゥ・コー Soloman de Caux [正しくは Salomon] もまた同様であった。しかしながら後者のデザインになるある噴水の値段は、113 ポンドかけて作られ、ネプチューンの彫像が乗った大理石の水盤でできていた；重さ 310 ポンドのハンダが彫像を

鑄造するのに使われ、多分後で金メッキされたのであろう。ドゥ・コーはペムブルック伯爵のためにウィルトンの庭園のデザイナーを引き受け、そこには「大理石の彫像がある 4 つの噴水が真ん中に」あり、また「2 つの池の真ん中にある噴水と 2 本の柱からは、思い切り高く水を噴き出している、そのてっぺんにある 2 つの王冠を動かしたり回したりしていた」。このほか、川が庭園の中を流れ過ぎていって、装飾的な橋が架けられていた。この橋は後に取り払われ、そこにはイニゴ・ジョーンズ Inigo Jones [1573~1652 年 建築家・舞台装置家] の有名な装置が建てられた。

ティオボルズの庭園もまたヘンツナーにより 1591 年にこう述べられている；「展望回廊の中にはイングランド国王の系図が描かれている；ここから庭園に入るが、水で囲まれて、一人でポート遊びに行くには十分な大きさで、茂みの間を漕いでいく；ここには非常に多種類の木や植物が植えられており、多大な手間をかけて作られた迷路、白の大理石でできた水盤のある噴水、そして木製あるいは他の素材で作られた柱とピラミッドが庭園のあちこちにあった。これらのものを見た後、庭師は私たちを夏のあずまやへと案内した。その下の階には、白い大理石で作られた 12 人のローマ皇帝の石像と石 truck-stone のテーブルが半円状に置いてある；上の階には鉛製の水盤が置かれておりそこにはパイプで水が流し込まれ、そうすることで魚を飼っておくこともできるし、夏には水浴びをするのにも大変便利であった。別のおもてなしのための部屋は、これのすぐ近くであって小さな橋で結ばれており、そこには赤い大理石の気品あるテーブルがあった」。

さてここでエリザベス朝の庭園のいくつかの特徴についての概観を終え、テラス、園路、小径、迷路、高台、あずまや、噴水、小川について一つずつ見てきたところである；残された課題はその全体について見るということだけである。庭園に関する次の 2 つの文献の中には、これらのすべての細部が織り込まれており、また両者とも同時代のものであるが、まったく違う 2 つの出典によるものである。一つは、美しい庭園を象徴するために作られた舞台に関する記述であり、それは『花の仮面』 *Maske of Flowers* という演劇の上演に際してのものである。これは 1613 年の十二夜祭 [クリスマスから 12 日後の 1 月 6 日に行われる宗教行事の前夜祭] にあたって、ホワイトホール宮殿で Gray's Inn の郷紳たちによって演じられたもので、「サマセット伯爵とフランシス令嬢との結婚式、彼女はサフォーク伯爵、チェンバレン卿の娘であり、そこで演じられた儼かで壮麗極まるものであった」*。もう一つはスペンサーの『妖精の女王』からのものであり、彼が「第二の楽園」として描き出している完璧な庭園の詩行である。

*この「仮面」は 1614 年に N. D. によりロバート・ウィルソンのために出版された。これは極めて希少価値の高いもので、引用は、Bishop's Stortford, Plawhatch の Rowley Smith 夫人所蔵の完璧な一冊からなされている。

「ダンスは終わった、大きな音楽が鳴り響いた。幕が引かれ、栄光に満ち奇妙な美しさを持った庭園が現れ、四隅に広がり、そこには十字の園路と四隅を一周する小径。十字の園路の中心には見栄えの良い噴水が聳え、それは4本の銀の柱の上に持ち上げられている。その上には4つの銀の彫像がまたがり、それは円周24フィートの木の幹を支え、地面からは9フィートの高さに作られ、その真ん中の銀と金の渦巻き模様の上には地球儀が置かれ、その地球儀は4つの金の仮面の頭で飾られ、そこからは水が木の幹に注ぎ込まれ、上には高さ3フィートの金のネプチューンが立ち、手には三つ又の鉞を持っている。庭園の壁は煉瓦製でそこには遠近法で人工的に絵が描かれており、壁に沿って全面に葉っぱと果物が描かれた果樹が並べられている。壁の内側の庭園には3フィートの高さで手すりが設けられ、銀の石弓によって飾られ、その合間には多彩な色彩の透明な光によって美しくなった台座が置かれ、その台座の上には銀の柱が立ち、その頂には金色の有力者たち、金色のライオン、そして銀色の一角獣が据えられている。有力者の一人一人と動物は燃える松明を掲げ、それが構造全体に光と輝きをもたらしている。4分割された庭園のそれぞれの区画はイトスギとネズの低い生垣で美しく囲われており；その中の結び目には造花がセットされている。4区画のうち最初の2つには、ピラミッドが2つあり、金と銀で飾られ透明な光できらきら輝き、ザクロ石、サファイア、そしてルビーに似る。4区画のそれぞれのコーナーにはオランダナデシコ gilliflowers の大きな鉢が置かれ、それらの背後から当てられる光のいくばくかを遮り、それにより、まばゆく見事な輝きを作り出していた。4区画の残りの2区画については、色どりも様々なチューリップ、そして中央およびこれらの区画のコーナーには、背後から当てられる秘密の光の輝きを受けて、何種類かの花の大きな塊が置かれた。庭園のさらに奥の端にはゆっくりとした傾斜で盛り上げられた高台があり、それは土地の塊にも似て、草で覆われている；その盛り土の上には、しっかりと作られた見栄えの良いあずまやが立ち、人造木、およびエグランタイン [ノバラ] eglantine、スイカズラなどのあずまやの花で覆われていた。あずまやは長さ33フィート、高さ21フィート、金と銀の terms [境界を示す古代ローマの境界神] で支えられていた。それは6つの二重アーチと庭園の3本の園路に通じる3つのドアにより区分されていた。あずまやの中央部には見栄えの良い大きな小塔が立ち、そしてどちらかの端には小ぶりの櫓が立っていた。高台の上には、その正面に花の土手が不思議なことに後ろに描かれており、一方、アーチの中では仮面を着けた人が見られないように座っていた。庭園の後ろで、あずまやの上には人造木が置かれ、それは庭園に合体する果樹園のようであり、至る所、澄みわたる夜空のように天空が遠景の中に引き込まれていく。あずまやの下の草のシートには庭園の神様が座り、その数12体、長い緑の正装用ローブを煌びやかに装い、頭上には贅沢なタフタ taffata [光沢のある平織り] の帽子、そして花の冠。それらの真ん中に Primaura [プリマベラ?] が植えられ、舞台に降りてきて国王の御前へと行進し、リュートとテオルボ [旧型のリュート] にあわせて歌った。」

“Fresh shadows fit to shroud from sunny ray:
Fair lawns, to take the sun in season due;
Sweet springs, in which a thousand nymphs did play;
Soft-running brooks, that gentle slumber drew;
High-reared mounts, the lands about to view;
Low-looking dales, disloign’d* from common gaze;
Delightful bow’rs, to solace lovers true;
False labyrinths, fond runner’s eyes to daze.
All which by Nature made did Nature ’self amaze,
And all without were walks and alleys dight,
With divers trees enranged in even ranks;
And here and there were pleasant arbours pight,
And shady seats, and sundry flow’ring banks,
To sit and rest the walker’s weary shanks.” †

* = remote from

† *Faerie Queene*. Book IV., c.x., 24.

(仮訳)

爽やかな木陰、太陽の光から隠れるのに適した：
美しい芝生、季節が来れば陽を浴びるため；
甘い泉よ、数多くの妖精が遊んだ泉よ；
静かに流れる小川、心地よい眠りを誘う；
高くそびえる高台、周囲を見渡すための土地；
眼下に潜む谷間、人の目を避け遠く離れ；
心弾むあずまや、本当の恋人たちを慰めるため；
欺く迷路、愚かにも急ぐ人の目を惑わすため
自然が作ったすべてが自然自らを驚かせる
そして外はぐるっと園路と小径が整えられ
そこにはいろいろな木々が同じように並べられ
そしてあちらこちらに快適なあずまやの柱
そして木陰の腰掛、と様々の花が咲き誇る土手
座って歩く人の疲れた足を休めるための

妖精の女王 第4巻 24 [と 25]